

## 近現代内蒙古地域史の文献研究

森 久 男  
鈴 木 立 子

### はじめに

日露戦争後の関東州租借と南満州鉄道株式会社設立以来、日本は満蒙地域への関与を深め、大正期には川島浪速によって二度の満蒙独立運動が企図された。満州事変後、1932年に関東軍は満州国を樹立して、東部内蒙古・ホロンバイルに蒙古人の特殊行政区域として興安省を設けた。1933年の熱河作戦後、関東軍は内蒙工作を開始し、1936年に察北を支配下に置いて蒙古軍政府を樹立した。1937年に盧溝橋事変が勃発するや、関東軍東条兵团は察南・晋北・綏遠を相次いで占領し、蒙疆三自治政府および蒙疆連合委員会が成立した。1939年に蒙疆三自治政府を合併して蒙疆連合委員会が成立してのち、1945年の敗戦に至るまで、日本は内蒙古の大半の地域を支配した。

内蒙古近現代史は日本との関係がきわめて密接であり、日中関係史の重要な研究分野を構成しているが、これまでその重要性が十分に認識されてこなかった。その理由としていくつかの要因が存在しているが、とりわけ歴史研究に不可欠な資料の入手難が決定的な要因として指摘できる。内蒙古を中心とした国際関係史はきわめて錯綜しており、中国語・モンゴル語・チベット語・日本語・ロシア語・英語等の文献に精通する必要があるが、語学上の制約もあり、実際にはこれらすべてに目を通すことは困難である。

日中関係史として内蒙古近現代史を研究する場合、中国語・日本語の資料がもっとも豊富である。中国語・日本語の資料のうち、戦前・戦中期に

南京国民政府蒙藏委員会・満州国蒙政部・蒙疆政権等の政府機関によって作成された一次資料はもっとも重要である。それと同時に、戦後に歴史の当事者が書き残した回顧録は、上述の一次資料を解読する際に重要な手がかりを与えてくれる。中国では、各地方の政治協商会議・地方史弁公室・中共党史研究室等が組織的に歴史の当事者の回顧録を収集している。日本では、満州国興安省・蒙疆地域からの引揚者が個人の立場から各種の回顧録を書き残している。

本稿の課題は、内蒙古を中心とした日中関係史を本格的に研究する予備作業として、中華人民共和国の内蒙古自治区政治協商会議が収集・刊行した『内蒙古自治区文史資料』を素材とし、満州国勃発から日本の敗戦に至る時期を主要な対象として、歴史の当事者が書き残した史料を系統的に分類・整理し、その概要を紹介することにある。

## I 人物伝

### 一 徳王

徳王は第一級政治犯として長年の間獄中であつたが、一九六三年四月の釈放から一九六六年五月の逝去まで、三年間の短い「自由」を享受した。内蒙古政治協商会議文史資料研究委員会は内蒙古近現代史の生き証人である徳王に回顧録の執筆を求めた。こうして、徳王は死の直前に『ドムチョクドンロブ自述』を口述している。徳王は内蒙古近現代史で中心的役割を果たした人物の一人であり、これは彼の個人史であるとともに、同時代史そのものの貴重な証言でもある。日中関係史という視点からみれば、今日関東軍の内蒙工作と蒙疆政権の歴史は研究史の空白になっているが、この回顧録はその不明部分に多くの光をあてている。回顧録の構成は次のとおりである。

#### 第一章 百靈廟蒙古自治運動の回顧

第二章 蒙古軍政府成立の前後

第三章 蒙古連盟自治政府の顛末

第四章 蒙古連合自治政府の成立と瓦解

第五章 北平三年

第六章 西蒙自治運動の経緯

第七章 モンゴル人民共和国へ赴いた経緯

この回顧録は、徳王がみずからの記憶をもとに口述し、トブシンが筆記・編集したもので、1965年までに七編の回顧録が完成している。1966年2月、『内蒙古文史資料』（以下『内蒙文史』と略記。第五輯）に第一章「百靈廟内蒙自治運動」のごく一部分が掲載され、同年中に全文出版の計画であったが、文化大革命によって中断された。文革終了後、1979年3月に再刊された『内蒙文史』（第六輯）に第二・三章が、1982年10月出版の『内蒙文史』（第七輯）に第四・五・六章が公表された。1979年6月には『文史資料選輯』（第六十三輯）に第一・二章の抄訳が発表された。1984年12月、『内蒙文史』（第十三輯）として、既発表部分と未発表の第七章を纏めた『ドムチョクドンロブ自述』が出版されている。しかし、残念なことに第一章の主要部分が欠落しており、その史料的价值が大きく損なわれている。

トブシンが編集した原稿は内蒙古自治区文史館に保管されていたが、文革の混乱のなかで盧明輝氏（内蒙古社会科学院元研究員）が閲覧の機会を得てそれらを筆写した。森久男は『徳王自伝』（岩波書店、1994年）を翻訳・出版した際、盧明輝氏から未発表である第一章の原稿を譲り受け、完全な形で翻訳・出版することができた。

現在、『徳王自伝』以外に入手可能な徳王に関する纏まった業績としては、盧明輝氏とジャクチト・スチン氏の著書がある。盧明輝氏は、『蒙古自治運動始末』（中華書局、1980年）を出版したが、同書は1998年に遠方出版社から『徳王其人』と改題して再刊されている。ジャクチト・スチン氏は、『我所知道的徳王和当時の内蒙古』（私の知っている徳王と当時の内蒙古）の草稿を脱稿してのち、その前半部分が1984年に、後半部分が1993

年に東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所から出版されている。両者の観点には大きな違いがあるが、徳王に関する記述の大半はいずれも、『ドムチョクドンロブ自述』を直接あるいは間接に引用している。

徳王は1933年に内蒙高度自治運動を開始し、多数の蒙古知識青年の支持を得た。そのなかの一人で徳王の側近となった陳紹武は、「ドムチョクドンロブと蒋介石との関係」（『内蒙文史』第一輯，1962年11月）において、1932年から1949年に至る徳王と蒋介石との特殊で複雑な関係を、みずからの体験を通して描き出している。もう一人の蒙古知識青年ハスオチルは、「ドムチョクドンロブと日本帝国主義との結託」（『内蒙文史』第五輯，1966年2月）において、蒙政会から蒙古軍政府、蒙疆政権の各時期において、徳王と日本との関係の概観を描き出している。陳紹武とハスオチルの回顧録は、『徳王自伝』と重複している部分が多いが、第三者の目で見た徳王評価として参考となる。

## 二 李守信

李守信は熱河匪賊から中小軍閥に成り上がり、1933年の熱河作戦後、関東軍の支持を得て、察東警備軍司令、蒙古軍副総司令を歴任し、日中戦争勃発後に蒙疆政権の蒙古総軍総司令を務めた。李守信は徳王に次ぐ内蒙古第二の政治犯で、釈放後に1964年から内蒙古自治区文史館に籍を置き、劉映元を助手として『李守信自述』を口述した。この回顧録の構成は、次のとおりである。

まえがき

第一章 私が生まれる前後の熱河南部蒙旗社会

第二章 熱河胡匪と私の胡匪としての経歴

第三章 蒙匪とバブジャブについての見聞

第四章 日本の侵攻・占領以前の熱河地方部隊

第五章 奉天軍と国民軍との戦争中、私が奉天軍と一緒に察北へ進攻し

た頃の回想

- 第六章 私がガダ梅林の蜂起部隊を鎮圧した経緯
- 第七章 私はどのように「馬賊」から漢奸になったか
- 第八章 私が傀儡軍を率いて察北でおこなった犯罪活動
- 第九章 日本が傀儡蒙古を支配した策略
- 第十章 傀儡蒙古政権の内幕
- 第十一章 蒙古軍成立初期の状況
- 第十二章 蒙古軍の発展と変遷
- 第十三章 蒙古軍の戦闘態度
- 第十四章 蒙古軍の腐敗堕落した状況
- 第十五章 私はどのように蒙古軍を掌握したか
- 第十六章 徳王はどのように蒙古軍を操ったか
- 第十七章 日本が蒙古軍を支配した方法
- 第十八章 徳王と一緒に日本と満州国を訪問した状況
- 第十九章 汪精衛が召集した青島会談に参加した経緯
- 第二十章 岡村寧次が召集した第一回河北傀儡軍首脳会議
- 第二十一章 白鳳翔が敵に投降した経緯
- 第二十二章 徳王が呉相文を処刑したエピソード
- 第二十三章 私と呉佩孚に関するいくつかの出来事
- 第二十四章 私と徳王が張家口から慌てて逃亡した状況
- 付 録 劉映元「李守信の晩年」

李守信の回顧録が発表された経緯としては、1979年3月、『内蒙文史』（第六輯）に第七・八・九章が掲載され、1982年10月刊行の『内蒙文史』（第七輯）に第十・二十四章が、1983年8月刊行の『内蒙文史』（第十輯）に第一・六章が公表された。1985年12月刊行の『内蒙文史』（第二十輯）で『李守信自述』と題して、未発表部分を含んだ全文が掲載されている。

王公出身の徳王と異なって、平民出身で、匪賊あがりの軍人である李守信には明確な政治的信念は存在しないが、自己保身のためであって、周囲

の政治的・軍事的状況を克明に観察し、とくに人間関係の分析は精密である。李守信の回顧録の意義は以下の三点に纏めることができる。第一、熱河地方の匪賊・自衛団・軍隊の具体的諸相を詳しく解明した。第二、蒙古人の目から関東軍の内蒙工作の展開過程を明らかにした。第三、蒙疆政権期の蒙古軍の実態や政権内部の権力構造を詳細に解き明かした。徳王と李守信の回顧録を比較しながら併読することによって、当時の内蒙古の錯綜した民族問題、政治・軍事情況を全体的に俯瞰することができる。

### 三 王公列伝

辛亥革命後、1913年に袁世凱は「蒙古待遇条例」を制定し、蒙古王公は清朝以来の盟旗制度に基づく封建的特権が認められた。蒋介石の全国統一後、南京国民政府は若干の制度改革を前提として盟旗と省県との並存を認めた。満州国成立後、東部内蒙古では王公の封建的特権が廃止された。こうして、国民政府の支配下に留まった西部内蒙古のみに王公制度が残った。盟旗の王公制度は封建制の残滓であるが、旗（県に相当）の牧畜民を実質的に支配しているのは王公であり、彼らの政治的意向を無視して、盟旗制度の変革はできなかった。

『内蒙古近現代王公録』（『内蒙文史』第三十二輯、1988年12月）は、第三者による回想録・研究論文であるが、その構成は次のとおりである。

呉恩和・邢復礼「カラチン親王ゴンサンノルブ」

ボルジジト・ウンドルネフ「ダルハン王の生涯の略述」

羅永寿・張文第・張世傑「アラシャン王ダリジャヤの生涯」

ダグワオスル「ソングリンチンの後継者—ボヤンナムフとその子孫」

卓力克「正婦人から旗長代理へ—二番目の姉奇俊峰の思い出」

ボヤンマンド「私の知っているビント王ゴンチュガスロン」

奇宝璽「トブシンジルゴルの生涯の略説」

彭祝三「バリン郡王スダンナムジルジャルワブの一生」

鮑璽「アオハン親王ラジャラリンチンワンブとその家系の逸聞」

鮑楓珊「アオハン貝子府と徳王」

鮑繩武「私はどのようにして小王子になったのか」

ボヤンマンド「コルチン右翼前旗ウタイ王反乱始末」

李景唐「ダライ貝子と彼の息子ドルジ」

『内蒙古近現代王公録統編』（『内蒙文史』第三十五輯，1989年12月）は、同上書の統編で、その構成は次のとおりである。

彭平陽「政海風雲五十年—サクドルジャブの生涯の略述」

スルンアルブ・ダフラバヤル「ユンタンワンチュク事略」

ブダバラ「アバガ大王ヤンサン事略」

ガリブクト「オジナ郡王ダワンジャブの一生」

汪炳明「スニト右旗郡王ドムチョクドンロブの生涯」

スホバル「コルロス前旗旗長チムトスンブル史略」

ジャライト旗政協文史資料委員会「ジャライト旗最後の王バトマラブタン」

ムスン「大バリン郡王ジャガルドルジ」

ゴルロ「オールドニ郡王ソンジンワンチョク」

希儒博「ナイマン旗郡王マシバトルとスジュクトバトル父子」

ワンチンドルジ「アルコルチン郡王ワンチンパルライ略伝」

「ウェンニユート旗政協文史弁公室「ウェンニユート左旗最後の王ラチンワンチョク」

王哲・王世民・暴風雨「トムト左旗最後の王ユンタンソンプの生涯の概述」

秦樹英・ゴルジャブ「ダラト旗最後の旗長ハンダドルジ」

李泉林「ドグシン大王—スワンノルブサンバ」

『王公補遺 蒙俗風情捨粹』（『内蒙文史』第四十四輯，1993年12月）は、同上書の続々編で、その構成は次のとおりである。

奇忠義「王府春秋」

奇天祥「私の自述」

斎克斎「ラマ旗旗長ロブソンリンチン小伝」

李絮白「イエシハシグーコルチン右翼中旗最後の旗長の記事」

陳泰山「子豚の放し飼い，公爺，旗長—バヤンナムル小伝」

鮑靖方「ジウム盟王公会議と“蒙古平民同志会”」

トブシン「アラタンオチル事略」（『内蒙文史』第十輯，1983年8月）は、イクジョウ盟副盟長・ハンギン旗旗長アルタンオチル（阿王）が、徳王・傅作義・日本軍・八路軍の間で政治的に翻弄された生涯を描いている。奇天祥「回憶阿王片断」（同上書）は、阿王の部下の回想録で、蒙疆政権期から国共内戦末期に至る阿王の政治的軌跡を描いている。以上の二編の回顧録は、資料が乏しい蒙疆政権のオルドス支配を知る上で貴重な史料である。

オリンチンダライ「私がモーミンガン旗を脱出した経緯」（同上書）は、ウランチャブ盟モーミンガン旗旗長チムドスルンホルロの妻の手記である。徳王の回顧録は、1941年に同旗長が特務機関の圧迫下で自殺した事件についてごく簡単に記しているが、オリンチンダライの手記は当時のモーミンガン旗の状況を具体的に描き出している。

西蒙アラシャン旗旗長ダリジャヤは徳王の内蒙高度自治運動を支持し、1936年に定遠營に特務機関の設置を受け入れた。盧溝橋事件後、1938年にダリジャヤは馬鴻逵によって銀川で一時拘束され、さらに蘭州で十一年間軟禁された。国共内戦末期の1949年に釈放され、徳王とともに西蒙自治運動に参加した。ダリジャヤ「馬鴻逵のアラシャン旗に対する残酷な圧迫・搾取」（『内蒙文史』第一輯，1962年11月）は、この間のアラシャン旗の悲惨な状況を綴っている。ダシフン「私の父親ダリジャヤの思い出」（『内蒙文史』第十七輯，1985年12月）は、娘の視点からダリジャヤの政治的生涯を概観している。

## II 蒙古自治運動

蒙古自治運動に関する一般的認識としては、1933年の徳王による内蒙高度自治運動の開始から1934年の百靈廟蒙政会の成立に至る過程の蒙古人



の民族主義運動であると狭義に理解されている。しかし、盟旗自治を求める蒙古人の民族主義運動の原点はもう少し遡る必要がある。すなわち、蒙古自治運動は、1928年6月に北伐軍が北京を占領し、9月に熱河・チャハル・綏遠特別区へ省県制が施行される過程で、北平で成立した蒙古代表团が盟旗地帯への省県制施行に反対して南京で展開した請願活動を起点とすべきである。すなわち、蒙古自治運動とは、熱河・チャハル・綏遠三省の新設によって法的基礎を失った盟旗の自治組織を守る運動として、広義に理解しなければならない。

張紹庭「呉鶴齡和“蒙古各盟旗連合連合駐京弁事処”的活動」(『内蒙古文史』第六輯, 1979年3月)は、呉鶴齡を中心とする蒙古代表团が1928年末に南京でおこなった請願活動, 1930年の蒙古会議, 1931年の「蒙古盟部旗組織法」公布, 1932年の蒙古各盟旗連合駐京弁事処をめぐる呉鶴齡と徳王の確執, 1933年の内蒙高度自治運動, 1934年の百靈廟蒙政会成立, 1935年の徳王の対日接近について概観している。初期の蒙古自治運動の立役者は呉鶴齡であり、彼と徳王との抗争過程で内蒙高度自治運動が高揚していく。『徳王自伝』には1928年から1931年にかけての蒙古自治運動の前史が記されていない。この意味で、張紹庭の回顧録は歴史の空白を埋める貴重な史料である。

1930年の蒙古会議は南京国民政府の蒙古政策を策定するための重要会議である。ボヤンマンド「私が南京“蒙古会議”に参加した思い出」(『内蒙古文史』第十六輯, 1985年12月)は、東部内蒙古の盟旗代表として会議に参加したボヤンマンドの回顧録である。この一文は、白雲梯一派(旧内蒙古国民革命党)、呉鶴齡一派(改良主義者)、封建的王公(保守派)の複雑な対立関係を紹介するとともに、蒙古会議における蒙古人と地方政府の対立、蒙古人内部の共和派と保守派の対立関係を描写し、国民政府による蒙古政策の立案過程の混沌とした状況を明らかにしている。

1932年以降の内蒙自治運動の経緯については、『徳王自伝』第一章に詳しく描かれている。同書の編集者トブシンは「百靈廟内蒙自治運動始末」

『内蒙文史』第二十九輯、1987年12月）を書いている。トブシンは南京政治学校蒙蔵班で学び、蒙政会教育処で勤務した経験の持ち主である。この一文は1963年4月5日（徳王釈放の5日前）に書き上げられており、徳王の回顧録と比較・対照することによって、トブシンの知見が後者にいかに反映されているかを窺うことができる。徳王の回顧録はトブシンとの合作という側面があり、この一文と徳王の回顧録を比較することによって、両者の相互関係を知ることができる。

徳王の内蒙高度自治運動の結果、1934年4月に蒙古人の統一自治組織として百靈廟蒙政会が成立するが、1935年10月の第三回蒙政会委員会総会で徳王が対日協力路線を明確にするや、国民政府は中央恭順派の盟旗を結集して、1936年1月25日に綏境蒙政会の設置を命令し、百靈廟蒙政会の分裂は必至となった。経革陳「綏境蒙政会始末記」（『内蒙文史』第五輯、1966年2月）は、百靈廟蒙政会が綏境蒙政会と察境蒙政会に分裂してのち、1945年の抗日戦争勝利に至るまでの綏境蒙政会の概況を記している。

1936年2月10日、対日協力路線を歩む徳王が蒙古軍総司令部を設立するや、21日に蒙政会内部の親国民党グループは、百靈廟で蒙政会保安隊の暴動を組織し、蜂起後に綏遠省側に身を寄せた。しかし、傅作義は百靈廟から脱走した蒙古人を冷遇したため、再度反乱を起こした。任秉鈞「雲繼先部隊の百靈廟武装暴動の経緯」（『内蒙文史』第五輯、1966年2月）は、この苦渋に満ちた武装暴動の経緯を、反乱参加者の視点から綴っている。

内蒙古近現代史において、内蒙自治運動はきわめて重要な位置を占めているが、『内蒙文史』に収録されている史料はあまりにも少ないと言わざるをえない。また、『ドムチョクドンロブ自述』の第一章「百靈廟蒙古自治運動の回顧」がごく一部しか公表されていないという点を勘案する時、内蒙自治運動の歴史は新中国の内蒙近現代史研究において、なお「禁区」（タブー）であるという事情を窺うことができる。

### Ⅲ 内蒙古をめぐる日中関係史

#### 一 満州国興安省

満州国興安省に関しては、日本人の回顧録が少ないので、中国側の回顧録によって補う必要がある。しかし、政治の実権を日本人に握られている状況にあって、漢族・蒙古族の回顧録の多くは植民地支配の非人道性を暴露する史料としての意義が認められるが、被支配者としての見聞は考察範囲が限られており、満州国の蒙古政策の立案・実施過程を理解する上での史料としてはあまり役に立たない。しかし、興安省成立前に蒙古独立軍（のち、蒙古自治軍）に参加し、のちに興安省・興安軍に参加した蒙古人、および興安軍参加者の手記は、一次資料の空白を埋めるものであり、史料としての価値が高い。

『内蒙文史』には、興安省と関連した各種の史料が収録されているが、その多くは『偽蒙興安史料』（『内蒙文史』第三十四輯、1989年12月）に再録されている。本書の内容は玉石混淆であるが、興安省成立初期の回想録、興安軍に関連したいくつかの史料、関東軍第五部隊の記録は貴重である。本書の構成は次のとおりである。

ナムハイジャブ「“泰来会議”の前後」

ナムハイジャブ・ダグワオスル「“鄭家屯会議”の回想」

ナムスライジャブ「興安省の由来、変遷、およびその組織機構」

高純徳「興安東省概況」

ナムスライジャブ「興安南省概況」

暴有山「興安西省概況」

阿必徳・宝徳「興安北省概況」

アラタ・カンチョグス・シャワン「偽満州国協和会」

ジョンジュルジャブ「内蒙自治軍始末」

ランダワ「興安軍の建設と変遷」

シャワン「偽鉄石部隊見聞」  
ラシダワ「偽満州国第五三部隊始末」  
張維榮「興安南警備軍概況」  
包化民「興安陸軍軍官学校」  
オネンルト「私が知っている偽満の日本士官学校への派遣生」  
ナムスライジャブ「興安総省および王爺廟地区の警察，憲兵，特務機構」  
唐国棟「日本・偽満期の林西県の軍隊，憲兵，特務組織の概況」  
田垣「満州里の警察，憲兵，特務機構の概況」  
内蒙政協文史弁公室「偽満蒙政務大臣チムトスンプル」  
内蒙政協文史弁公室「偽満国務院興安局総裁バトマラプタン」  
内蒙政協文史弁公室「偽満興安総局総裁ジャガルドルジ」  
ジョンジュルジャブ「“凌陞通敵事件”の真相」  
内蒙政協文史弁公室「偽興安南省省長イエシハシグ免職事件」  
涂波・包彦「“蒙地奉上”と“蒙民厚生会”」  
蒼書勲「日本・偽満期の兵役見聞」  
白広義「私が知っている偽満興農合作社」  
魏連雲「錢家店蒙古農民道場」  
張躍庭「興安水産株式会社」  
王魁「満州国の“新学制”の回想」  
ナムハイジャブ「偽満に成立したラマ宗団」  
トムバラ「カラチン左翼後旗のラマ学校」  
シャワン「日本侵略者が葛根廟に伸ばした魔の手」  
李志武・周義「開魯の阿片組合」  
烏秀清「鉄蹄下の歲月—日本侵略者のカラチン旗における暴政の記録」  
ダグワオスル「カラチン左翼後旗で一年に一万頭の牛を出荷した記録」  
呉慶麟「日本の突泉県での“穀物出荷”」  
谷瀛浜「ハイラルの日本・偽満の地下工事見聞」  
李殿文「林西県葉来蓋における関東軍の犯罪行為」

程恩英「一家全員で労役に出る」

曹徳貴「労役の苦難は語り尽くせない」

ボルチョル「日本における蒙漢労務者」

李万貴「偽満勤労奉仕隊」

王広鈞「開魯における日本・偽満の経済収奪」

李長春「日本侵略者の鉄蹄下のダライノール炭坑」

陳鐸・楊玉福「田宝屯のペストの追叙」

薛双喜「日本・偽満統治期のオウエンコ族の苦難」

内蒙政協文史弁公室「ノモンハン戦争における日本軍の細菌戦」

バト・シャワン・陳泰山「中村事件—チャルセン鎮の災難」

フフバートル「ノモンハン戦争臨場記」

ジョンジュルジャブ「ノモンハン戦争の回想」

ナムスライジャブ・トンバト「ウランホトのジンギスカン廟」

陳泰山「偽満興安地区重要人物の簡単な紹介」

草原の牧畜民には教育の機会がなく、政治的観念をもちえなかった。他方、漢族の入植によって農耕地化した盟旗の蒙古人は、しだいに生活習慣が漢族化していったが、教育の機会に恵まれた。内蒙古の民族主義運動の原動力となったのは、農村出身で都市で教育を受ける機会をもった蒙古知識青年である。東部内蒙古の盟旗はかなりの地域で農耕地化がすすみ、ジルム盟・ジョソト盟出身者は、民国期以降の蒙古民族主義運動で大きな足跡を残している。徳王の内蒙高度自治運動を支えた蒙古知識青年のなかにも東部内蒙古の出身者が多い。

ダグワオスル「私の経歴と見聞」『内蒙文史』第三十一輯（1988年12月）は、ジルム盟コルチン左翼後期出身の蒙古知識青年が辿った典型的な生涯の記録である。ちなみに、ダグワオスルの同窓である包海明は徳王が率いる蒙古軍第九師師長になっている。ダグワオスルは1929年に北京大学に入学するが、それまでに包悦卿・郭道甫・ガダ梅林等の著名人と交わっている。ダグワオスルは北京で雑誌『蒙古』を編集して蒙古自決の主張を展

開した。満州事変後、ダグワオスルは興安南省で警佐から警務庁保安科長へと出世し、さらに民生庁長、コルチン左翼後期旗長、興安総省参事官に抜擢され、日本敗戦の直前には大同学院に入学している。日本の敗戦後、ダグワオスルは東蒙古自治政府の樹立と解散、内蒙古自治政府の成立に関与している。

ジョンジュルジャブ「私の半生の回顧」(『内蒙文史』第四十輯、1990年12月)は、バブジャブの三男が書き残した回想録である。ジョソト盟トムト左旗出身のバブジャブは川島浪速の満蒙独立運動に協力したことで有名である。ジョンジュルジャブは若い頃から日本人の庇護のもとで教育を受け、日本の陸軍士官学校を卒業してのち、1928年に満鉄鄭家屯公署の嘱託になっている。満州事変が勃発するや、兄のカンジュルジャブと協力して蒙古独立軍(のち、蒙古自治軍)を組織し、満州国興安省が成立するや、興安局警務科に勤務してのち、治安部警務司検閲科検閲股長、騎兵上校、興安軍管区参謀処長、興安師歩兵团長、第十軍管区参謀長を歴任し、1945年8月にソ連軍がハイラルに進撃するや、関東軍に反乱を起こして、ソ連軍に投降している。

ワンダン「私が歩んだ道」(『内蒙文史』第四十一輯、1990年12月)は、コルチン左翼後期の富裕な家庭に育った蒙古人の手記である。ワンダンは満州国警備軍少年隊に入隊して見習い士官となり、ノモンハン事件で九死に一生を得てのち、航空学院第一期生として入学し、通遼航空大隊で操縦士であった時に日本の敗戦を迎えた。日本の敗戦後は中国共産党に入党し、遼瀋戦役の際には東北野戦軍の一団長として作戦に参加している。

## 二 蒙古軍政府(チャハル盟公署)

1933年以降の関東軍の内蒙工作、察東特別自治区・チャハル盟公署・蒙古軍政府の樹立過程については、『ドムチョクドンロブ自述』『李守信自述』にかなり詳しい記述がある。前者は、蒙古民族運動のリーダーとして、百

靈廟蒙政会が関東軍に接近していく過程を、おもに政治的側面から体系的に叙述している。後者は、軍事問題の記述に重点が置かれ、歴史の推移を論理的に説明するというより、錯綜した人間関係の具体的な様相を克明に分析しており、前後の脈絡の把握に難があるが、その緻密な記憶力は驚嘆すべきものがある。

『偽蒙古軍史料』（『内蒙文史』第三十八輯，1990年8月）は、内蒙古自治区公安厅から提供された資料に基づいて編集されており、チャハル盟公署設立から蒙古軍政府樹立に至る時期の蒙古軍成立の経緯、蒙疆政権期の蒙古軍、および抗日戦争勝利後の蒙古軍の変遷が系統的に説明されている。本書は、通常は表に出ない公安史料を用いており、利用資料の価値がきわめて高いが、整理方法が不適切なため、資料の価値を大きく損なっている。

チャハル盟公署の樹立にあたって、国民党系蒙古人呉鶴齡・白雲梯・尼冠洲が参加した。しかし、尼冠洲は蒙政会の対日協力と政府の許可がないチャハル盟公署の樹立に反対したので、張北からの帰途関東軍特務機関によって暗殺された。ハスオチル「尼冠洲の死」（『内蒙文史』第六輯，1979年3月）、焦月岩「尼冠洲被害の経緯」（『内蒙文史』第二十九輯，（1987年12月）は、尼冠洲暗殺前後の状況を記している。前者は、蒙政会における尼冠洲の立場を明確に説明し、後者は、尼冠洲殺害の現場の状況を具体的に描写している。

王英は後套の水利開発を推進した王道春の息子で、綏西の秘密結社のボスとして有名である。1936年11月の綏遠事件の際、王英は田中隆吉参謀が作った漢族謀略部隊である大漢義軍の司令となった。1940年初頭に駐蒙軍が五原作戦を実施した際、王英は綏西聯軍を率いて従軍している。韓祥符「王英一生の罪惡活動」（『内蒙文史』第六輯，1979年3月）は、西部内蒙古で悪名を轟かせた王英の数奇な生涯を簡潔に記している。

綏遠事件で大漢義軍が察北から綏東へ進出するや、傅作義軍は蒙政会の本拠地百靈廟を急襲して陥落させた。当時、百靈廟を守備していたのは、チャハル出身者で組織した蒙古軍第七師（師長ムクドンボ）である。ハス

オチル「ムクドンボの軍隊編成と百霊廟からの放逐の概要」(『内蒙文史』第二十九輯, 1987 年 12 月) は, 第七師編成の経緯から百霊廟での敗戦, シャラムリンで同師が反乱軍によって武装解除された経緯を記している。

### 三 蒙疆政権

#### 1 政権機構

蒙疆政権は蒙疆三自治政府の時期と蒙古連合自治政府の時期に区分できる。『ドムチョクドンロブ自述』『李守信自述』は, 蒙疆政権の全時期について詳細な記述をおこなっている。前者は, 蒙古の独立・建国問題を縦糸として, 徳王が蒙疆政権のなかで果たした役割を, おもに政治的側面から体系的に論じている。後者は, 政治的理念がまったく欠落しているが, 軍事問題を中心として, 蒙疆政権を支えた周辺の人びとの動きを詳細に分析している。

奇天祥「蒙疆政府時代の回想」(『内蒙文史』第五輯, 1966 年 2 月) は, 蒙古連盟自治政府の成立後, イクジョウ盟の一部(ジュンガル旗・ダラト旗・ハンギン旗)が蒙疆政権の影響下に入ってから, 1945 年 8 月に同政権が崩壊するまでのオールドス地域の軍事・政治機構の変遷を概観している。白光遠「偽蒙古連盟自治政府の拾遺」(『内蒙文史』第二十九輯, 1987 年 12 月) は, 蒙古連盟自治政府成立直後の行政機構・主要人事を簡単に紹介している。張永昌「偽蒙疆政府政務院雜記」(同上書) は, 蒙古連盟自治政府政務院長呉鶴齡の秘書の回顧録で, 日本人によって実権が握られている状況下で, 政務院の執務がどのようにすすめられていたかについて述べている。

#### 2 憲兵・特務・警察

張問之「日本侵略者, および偽蒙疆政府の特務, 警察機関」(『内蒙文史』第十五輯, 1984 年 12 月) は, 関東軍の内蒙工作から蒙疆政権期にいたる日本の特務機関・憲兵隊・警察の機構を概観している。李士栄「日本侵略



者の殺人の魔の手一包頭日本憲兵分隊」(『内蒙文史』第二十六輯, 1987 年 12 月) は、包頭憲兵分隊の内部機構を詳しく説明するとともに、抗日活動摘発の事例をいくつか紹介している。李士榮「貿易活動によって仮装した日本特務組織一東公記貨行」(『内蒙文史』第二十九輯, 1987 年 12 月) は、1940 年に国民政府統治下の西北地域に対する諜報活動のために包頭で設立された貿易会社の機構と活動の概況を紹介している。

### 3 蒙古軍

李守信は蒙疆政権の蒙古軍総司令で、彼の回顧録はその内実を詳しく描き出している。蒙古軍のナンバー 2 は烏古廷であり、汪龍田・呉紫雲「烏古廷が日本傀儡に身を投じた前後」(『内蒙文史』第二十九輯, 1987 年 12 月) は、1933 年の熱河作戦後に李守信軍に身を投じてから 1945 年の蒙疆政権崩壊までの烏古廷の事跡を概観している。ポヤンマンド「偽蒙疆の軍事幼年学校」(同上書) は、1940 年に西スニト旗に設けられた蒙古軍幼年学校の設立から、1945 年 8 月のソ蒙軍の対日参戦直後の幼年学校生徒蜂起にいたる経緯を論じている。胡・バジル「偽蒙古軍自動車隊史の断片」(同上書) は、1938 年に設立された蒙古軍自動車隊(厚和総隊・平地泉分隊・包頭分隊)の組織の概略と 1945 年における解体までの活動について述べている。

### 4 抗日救国運動と民衆弾圧

聶德俊「偽蒙疆時期の一大流血事件」(『内蒙文史』第七輯, 1982 年 10 月) は、1940・1943 年に厚和憲兵隊が抗日救国会関係者に加えた大弾圧事件を詳しく回顧している。彭謙「偽蒙疆時期に日本侵略者が大同知識界に加えた残酷な迫害」(『内蒙文史』第二十六輯, 1987 年 12 月) は、1941・1942 年に大同憲兵隊が教育関係者に対しておこなった迫害事件の生還者による回想である。齊寿康「血と泪の思い出ー日本侵略者による包頭抗日救国会の逮捕・殺害事件」(同上書) は、1939 年末の傅作義軍の包頭城内進

入事件後、1940年に包頭憲兵隊によって抗日救国会メンバーに加えられた大規模な摘発事件を回想している。閻繼淑「綏遠抗日救国会の活動」(同上書)は、1939年秋に中共綏遠省委員会によって組織された綏遠抗日救国会の発展状況、および1940年の厚和憲兵隊による弾圧について回想している。

## 5 教育

トブシン「偽蒙疆教育の回想」(『内蒙文史』第七輯、1982年10月)は、蒙疆政権の教育責任者による回顧録であり、その教育行政・教育方針・学制・教科書編纂・蒙古留学生派遣・日本の教育政策等について論じている。徐志明「蒙疆学院略述」(『内蒙文史』第二十九輯、1987年12月)は、蒙疆政権の官吏養成のための高等教育機関である蒙疆学院について、その設立の経緯、教職員の構成、授業内容等について論じている。この回顧録は、同学院の教育方針には「親日防共」「日蒙親善」「民族協和」が貫徹され、「皇軍」の赫々たる戦功の発揚が目的であると位置づけている。

## 6 ラマ教

内蒙古の各盟旗では、ラマ教が広く信じられており、駐蒙軍はラマ教を利用して蒙古人をてなづけようとした。巴靖秀「五当召の仮装した日本のラマがチベットへ赴こうとして捕まった経緯」(『内蒙文史』第十五輯、1984年12月)は、綏西に駐屯する国民党軍將校による当時の風聞の回想で、二人の日本人(木村肥佐生・西川一三)のチベット行きの消息を伝えている。雲昌秀「五当召の“日本ラマ”」(同上書)は、同じ内容を別の角度から紹介している。ボヤンク「日本・偽蒙期の徳化“ラマ訓練所”」(『内蒙文史』第二十九輯(1987年12月)は、1942年から1944年にかけて、徳化特務機関が対モンゴル情報工作のために設けた青年ラマの教育訓練機関について紹介している。

## 7 公営賭場

蒙疆政権の各市・県では、財政収入をふやす手段として、公営賭場がおおっぴらに開設されていた。徳王と李守信の回顧録はいずれも公営賭場について論及しており、李守信は自分の部下がこれに深く関与していた状況を証言している。韓相符「罪惡の深淵—日本・偽蒙が包頭で開設した東西クラブ」(『内蒙文史』第二十六輯, 1987年12月)は、1938年に包頭で蒙古軍が作った東クラブと哥老会が作った西クラブについて、その経営内容を具体的に紹介していて興味深い。張漢臣「日本・偽蒙期の“クラブ”—公営賭場の見聞」(同上書)は、関東軍の集寧占領後に同地で公然と看板を掛けて営業を開始したクラブについて紹介している。

## IV 内蒙軍事史

### 一 綏遠抗戦

1936年11月に田中隆吉参謀と徳王が引き起こした綏遠事件は、中国では綏遠抗戦と呼ばれている。1935年6月の土肥原・秦徳純協定の締結後、ほとんど抵抗もなく察北を支配下に収めた田中参謀は、関東軍の精神的支援のもとで、大漢義軍(漢族謀略部隊)と蒙古軍の力で綏遠を容易に奪取できると夢想したが、綏遠省政府主席傅作義は優勢な兵力を集中して大漢義軍のホンゴルト攻撃を撃退し、さらに蒙政会の本拠地百靈廟を陥落させた。傅作義軍は容易に察北を回復できる軍事力を保持していたが、蒋介石の強力な指導に従って、土肥原・秦徳純協定を遵守し、蒙古軍政府の支配地域に進攻しなかった。

綏遠抗戦については、『内蒙文史』第六輯(1979年3月)、第十四輯(1984年12月)に数編の回想記が掲載されているが、『綏遠抗戦』(『内蒙文史』第二十五号, 1986年12月)にその大半が再録されている。本書の構成は次のとおりである。

傅作義「綏遠抗戦の経過の詳しい記録」

董其武・孫蘭峰「一九三六年綏遠抗戦始末」

王雷震「三十五軍綏遠抗戦」

張培勲「ホンゴルト防衛戦」

郭根深「綏東ホンゴルト戦役紀実」

韓春生「ホンゴルト戦役中の騎兵第一軍」

郭瑜「ホンゴルト防衛戦簡況」

富廷璽「二回のホンゴルト防衛戦の見聞」

武殿林「ホンゴルト戦役で活躍した蒙古族騎兵部隊」

王謙「軍民共同でホンゴルトを守る」

李忠孚「ホンゴルト戦役前後」

孫長勝「百霊廟戦役親歴記」

劉效曾「百霊廟戦役の回想」

孟昭第「百霊廟の大勝利」

韓天春「女兒山を攻略し、百霊廟を回復」

張振耀「百霊廟と大廟を回復した経緯」

令孤理「百霊廟回復の回想」

陳濟徳「北国の戦場で招聘に応じる」

勒書科「百霊廟抗日戦役前後」

劉春方「綏遠抗戦中の傅作義將軍と日本特務との闘争、および傀儡軍を寝返らせた経緯」

百霊廟攻略作戦に参加した主力は、第三十五軍の騎二旅（旅長孫長勝）および二一一旅（旅長孫蘭峰）である。山東省滕州政治協商会議文史資料委員会が編集した『愛国將軍孫蘭峰』（中国文史出版社、1993年10月）は、孫蘭峰本人および彼の部下達の回想録40編を収録している。同書は、綏遠事件、盧溝橋事件後の抗日戦争、全国解放戦争において、孫蘭峰が綏遠地域で果たした軍事的役割について、多角的に論じている。

## 二 国民党の抗日戦争

### 1 抗战初期

盧溝橋事件後、戦火が華北全域に及びつつあった頃、傅作義の第三十五軍主力は、南口からチャハル・晋北へと転戦しており、本来の駐屯地域である綏東の守備は手薄であった。韓伯琴「抗战期傅作義部隊の綏遠撤退と太原での敗北」（『内蒙文史』第六輯，1979年3月）は、当時の傅作義軍の困難な状況を回想している。韓伯琴「綏東抗战の回想の断片」（『内蒙文史』第十六輯，1985年12月）は、閩東軍蒙疆兵团に攻略された豊鎮・集寧の傅作義軍の内情を伝えている。于鶴齡「劉桂五將軍殉国記」（同上書）は、安北付近で戦死した騎六師師長劉桂五の戦死状況を記している。王雷震「三十五軍四二二团抗日战士英名録」（同上書）は、太原陥落後、綏遠南部に挺身した第三十五軍が1938年4・5月に第二十六師団と交戦した模様を記している。

馬占山は満州事変後の反満抗日運動で有名であり、何度も戦死が報じられたが、盧溝橋事件後に綏東抗战に参加してその健在ぶりを示した。奇天祥「八年抗战中の東北挺身軍」（『内蒙文史』第二十二輯（1987年1月）は、綏東から黄河南岸へと転戦してのち、1945年までの馬占山と東北挺身軍の顛末を紹介している。杜海榮「馬占山將軍が綏遠で抗战した経緯」（同上書）は、馬占山の東北挺身軍が綏遠でおこなった各戦闘を簡単に纏めている。

宋聿修「抗战初期察綏転戦の経緯」（『内蒙文史』第二十六輯，1987年12月）は、趙承綏騎兵第七師（中央軍）の参謀長の手記である。盧溝橋事件後、騎七師は蒙古軍政府が支配する徳化・商都・張北へ侵攻したが、閩東軍東条兵团・蒙古軍に逐われて綏西に退却し、1938年春に綏遠南部で第二十六師団と交戦した。この回顧録はこれらの交戦記録である。郭夢龍「二十九軍と宋哲元將軍の回想」（『内蒙文史』第三十三輯，1988年12月）は、1931年の第二十九軍建軍以来の同軍と宋哲元の動向を時系列的に考察しており、その末尾で盧溝橋事件後の同軍の作戦の概要を説明している。

## 2 綏南・包頭・五原戦役

1938年4・5月、晋西北から出撃した傅作義軍・騎七師は綏遠南部の第二十六師団守備地域への攻勢を開始し、同師団搜索隊の騎兵中隊は壊滅的打撃を被った。王雷震「三十五軍が綏南へ挺身した戦役」(『内蒙文史』第十六輯, 1985年12月), 張進修「回憶綏南抗戰」(同上書), 孫蘭峰「一九三八年綏南戦役概述」(『内蒙文史』第二十二輯, 1987年1月), 杜炳文「綏南戦役後の日本・偽蒙軍の暴行」(同上書)は、この綏南戦役を回想している。孫蘭峰は第二一旅旅長として作戦に参加しており、同戦役を要領よく纏めているが、その戦果の評価は過大である。

1939年12月、第八戦区副司令長官傅作義は国民党軍の冬季攻勢の一環として包頭攻略を計画し、陽動部隊を使って騎兵集団主力の装甲部隊を他地域へ誘き出してのち、包頭市内へ部隊を突入させ、数日間同市の半分を占拠した。この作戦で面子を失った駐蒙軍は、1940年初春に二回の五原作戦を実施して五原を占拠した。五原から計画的に撤退した傅作義軍は、駐蒙軍が撤退してのち、蒙疆政権の警察隊・蒙古軍の弱体な兵力が守備する五原を急襲した。この知らせを受けた駐蒙軍は再度主力部隊を動員して五原を占領したが、短期間で同地から撤退した。この五原作戦は無益な作戦で、傅作義側・日本側ともに大きな打撃を被り、これ以後1945年に至るまで、傅作義軍と駐蒙軍との間では実質的な停戦状態が続いた。包頭・五原作戦については、以下の回想録がある。

安春山・宋海潮「抗日戦争中の包頭、綏西、五原三戦役後の回想」(『内蒙文史』第七輯, 1982年10月)。張漢三「水川伊夫中將射殺の目撃記」(同上書)。董其武「包頭・綏西・五原の抗日三戦役の回想」(『内蒙文史』第十六輯, 1985年12月)。袁慶棠「傅作義將軍の綏西整軍と抗戰の若干の回想」(同上書)。靳書科「傅作義部隊の包頭攻略、綏西会戦、五原での敵殲滅の経緯」(同上書)。魯樂山「私が体験した包頭進攻戦役」(同上書)。孫英年「我が経験した包頭、五原戦役」(同上書)。王五典「綏西抗戰の回想」(同上書)。孫蘭峰「五原戦役の回想」(『内蒙文史』第二十六輯, 1987年12月)。

月)。

『綏遠抗戦(元国民党軍将領抗日戦争体験記)』(中国文史出版社, 1994年)の「第三章 綏遠作戦」は、以上の回想録の多くを再録している。中でも、張漢三「水川伊夫中将射殺の目撃記」は、水川伊夫中将の死体を戦場で発見したと記しているが、駐蒙軍には水川中将は存在しない。綏西警備軍司令官水川依夫(治安部次長)は、二百三十数名の日系警察官を指揮したが、軍人ではなく、警察幹部である。五原作戦後、水川は生還し、作戦指揮の不手際の責任を取って、本国に召還されている。

### 3 戦後処理

日本の敗戦後、蒙疆政権は重慶国民政府に投降しようとしたが、張家口・大同間の京包線が八路軍によって切断された結果、政府要人は駐蒙軍と一緒に北京へ脱出し、張家口は八路軍に接收された。他方、包頭・帰綏・大同は国民政府軍に接收された。斬書科「第十二戦区が包頭、帰綏、大同の投降した日本・偽蒙軍を接收した経緯」(『内蒙文史』第十七輯, 1985年12月)は、傅作義の第十二戦区が包頭・帰綏・大同を接收した経緯を記している。

### 三 八路軍の抗日戦争

八路軍は蒙疆政権管内に晋察冀抗日根拠地と晋綏抗日根拠地(大青山抗日根拠地)を建設した。『内蒙文史』にも一部の回想録が収録されているが、数は多くない。中国共産党は独自の党史研究機構を数多く擁しており、人民解放軍系統の研究機関も多数の抗日戦争史を発表していて、『内蒙文史』に収録された史料にはさほど重要性がないので、その内容紹介は省略する。

## むすび

内蒙古近現代史研究において、『内蒙古文史資料』は、歴史当事者の回顧録としての基本的性格から、事実誤認、主観的歴史解釈、政治的偏向等の欠陥は免れないが、一次資料を理解する上での貴重な補足資料であり、一次資料が存在しない場合には、唯一の資料源でもある。しかし、その内容は玉石混淆であり、史料としての価値を見極めながら取捨選択する必要がある。以上の制約条件を勘案した上でも、『内蒙古文史資料』は、内蒙古近現代史研究のための史料の宝庫であると評価することができる。

中国各地の政治協商会議が編集・出版している文史資料は、中国共産党の指導のもとで組織的な編纂がおこなわれてきた。これは長所でもあれば、短所でもある。長所の意味は、全国で体系的に歴史当事者の回顧録の収集がおこなわれ、史料の散逸を防いだ功績を指摘できる。短所の意味は、共産党の政治指導のもとで、かならずしも著者が本心を吐露しておらず、しかもその公表にあたっては、「政治的に正しくない」意見は発表されず、編集の際に一部で史料の書き換え、あるいは恣意的な削除がおこなわれていることである。

共産党支配下の中国では、内蒙古近現代史は共産党が人民を指導して解放を勝ち取った過程として単線的に理解され、国民党の蒙古政策や徳王の内蒙高度自治運動は、無視あるいは過小評価されてきた。また、中国には戦前期の日文資料が多数残存しているが、中国の歴史学者はこれらの歴史資料をあまり有効に活用しておらず、日本統治下の占領地の歴史が十分に解明されていない。内蒙古を中心とする日中関係史はなお多くの空白が残されている。

『内蒙古文史資料』は、内蒙古自治区政治協商会議が編纂した資料であり、市・県・旗の政治協商会議はさらに詳細な資料を編纂・刊行している。紙幅の関係上、本稿では後者について触れることができなかったが、市・県・旗レベルの文史資料を子細に検討することによって、さらに各地の具



体的状況を掴むことができる。こうした末端レベルの文史資料をすべて網羅して分析・整理することは容易ではないが、なお多くの貴重な史料が利用されないまま埋もれている可能性がある。

中国の地方史史料の収集状況を見れば、各地方政府の地方史弁公室、各地方の党委員会の党史弁公室が組織的に史料を収集している。本稿は『内蒙古文史資料』に考察範囲を限定したが、将来はさらに市・県・旗レベルでの史料の発掘、他省の関連資料の発掘、および政治協商会議以外の系統の史料発掘に務める必要がある。

(本稿は、愛知大学 1995 ～ 97 年度学内研究助成共同研究の一部である)。

## 近现代内蒙古地域史的文献研究

森 久 男  
铃 木 立 子

为了对内蒙古近现代史从日中关系史的角度来进行研究，十分丰富的中文和日语的原始资料已经存在。其中战前和战中时期南京国民政府蒙藏委员会、满州国蒙政部、蒙疆政权等政府机关留下来的档案是最重要的。与此同时，战后历史证人写下来的回忆录对深入了解上述原始资料，可以提供十分重要的线索。本文把中国内蒙古自治区政协已经出版过的“内蒙古文史资料”当做基本资料，对历史证人写下来的关于从“九一八”事变到抗战胜利的史料分为四个部分来进行系统的分析，即Ⅰ人物传记、Ⅱ蒙古自治运动、Ⅲ围绕内蒙古的日中关系史、Ⅳ内蒙军事史。因为在内蒙古近现代史的研究上“内蒙古文史资料”的基本性格是历史证人的回忆，就不可避免认错事实、主观主义的历史解释、政治上的一面性等等缺点，可是为了深入了解原始资料，它是十分重要的补充资料，在没有原始资料的情况下，也是唯一的资料来源。但是实际上其内容可以说是良莠混淆，判断着资料价值的同时，也要选择取舍让适宜来决定。尽管考虑到上述的限制，为了进行内蒙古近现代史的研究，“内蒙古文史资料”还可以说是一种史料的宝库。